

研 究

エゴグラムによる母親のパーソナリティと
育児ストレスの関連

— TEG II (東大式エゴグラム)・母性意識尺度・育児ストレス尺度より項目選出 —

島澤 ゆい¹⁾, 渡辺 恭子²⁾, 川瀬 正裕²⁾

〔論文要旨〕

本研究は、母親のパーソナリティが母性意識を介して、育児ストレスにどのように関連するかについて、育児中の母親143名を対象にエゴグラムを実施し、パス解析を試みた。その結果、「FC (自由な子ども)」の得点が高い場合、直感的な感覚や自由さが肯定的な母性意識に影響を与えストレスを軽減するという結果が得られた。反対に、順応した子ども「AC (順応した子ども)」の得点が高い母親は、育児に対して「～しなければならない」という観念が強く、自身の理想とする育児ができなかった時にストレスを感じてしまう傾向にあると推察された。

Key words : エゴグラム, 育児ストレス, パーソナリティ

I. 緒 言

近年、児童虐待や母親のうつ状態といった子育て期間中のトラブルが増加し大きな社会問題となっている。特に、妊婦や乳児をもつ母親への支援の重要性が指摘されているが、地域の母子保健活動にはバラつきがあり、十分なフォロー体制をとっているとは言い難い状況がある¹⁾。また、厚生労働省は「健やか親子21」の取り組み目標の1つに「育児不安の軽減」を掲げ、母親への支援の強化を唱えている²⁾。

繁多らは、「はじめての育児では、育児に関する適切な助言者が近くにいない場合、あるいは、逆に情報が多すぎる場合に育児ノイローゼになりやすい」³⁾と報告し、また、「育児不安をもつ母親は、早期に適切な指導を受けるとともに、母親自身の心身の休養、自分なりの育児方針を持つことが大切である。さらに、母親をめぐる人々、特に父親の情緒的な援助が重要で

ある」³⁾と述べている。また、光盛らは、虐待予防について、「未だ虐待が増加している現状を踏まえ、虐待予防には地域支援に加え、母親自身の根底の問題を母親自身が取り組める方向へと解決する必要がある」⁴⁾と述べている。

こうした問題を踏まえ、育児ストレスの関連要因を探り、育児ストレスを問題とする母親への支援に有効的に活用できるサポートを検討することが必要であると考えられる。

本研究では、育児ストレス軽減・加重の関連要因を検討することを目的とした。

エゴグラムを用いた症例の検討において、育児ストレスに関する母親の要因として、母親の否定的な育児に対する意識、母親のコミュニケーション能力やパーソナリティが育児ストレスに関連していることが示されている。また、母親のパーソナリティの中でも特に自我状態について、育児不安の低い母親や、産後育児

Mothers' Personality in Relation to Parenting Stress
— A Study Using an TEG II, Maternal Consciousness Scale, Scale for Childcare Stressors —
Yui SHIMAZAWA, Kyoko WATANABE, Masahiro KAWASE

[2630]

受付 14. 4.17

採用 14.12.10

1) 金城学院大学大学院人間生活学研究科 (大学院生)

2) 金城学院大学人間科学部多元心理学科 (研究職 / 臨床心理士)

別刷請求先: 島澤ゆい 金城学院大学大学院人間生活学研究科 〒463-8521 愛知県名古屋市守山区大森2-1723

Tel : 052-798-0180 Fax : 052-798-4462

障害を来した母親に、「FC(自由な子ども)」と「AC(順応した子ども)」というパーソナリティが関連しているという結果が得られている⁵⁶⁾。エゴグラムにおいて高い「AC」得点と低い「FC」得点というパーソナリティ傾向を持つ母親は、育児に対してネガティブな感情を抱きやすく、育児不安や育児ストレスに何らかの影響を与えていると推察される。そこで、本研究では、母親の自我状態の中でも TEG II (東大式エゴグラム) の「FC」と「AC」に着目し、子どもの自我状態を示すパーソナリティと母性意識尺度⁷⁾の「MP(積極的・肯定的母性意識)」と「MN(消極的・否定的母性意識)」との関連、育児ストレス尺度⁸⁾による育児ストレスとの影響について量的に研究を行った。

II. 方 法

研究の調査期間は、201X年8～9月の1か月間であった。研究対象者は、A市保健センターの健診および育児教室(1歳6か月児健診、2歳児歯科健診、離乳食教室)、子育て支援施設へ参加した母親143名であった。倫理的配慮としては、保健センターの担当者に調査目的を口頭および文書で説明して理解を得た。また、対象となる母親には、研究の目的とプライバシー保護について説明した同意書に署名を求めた。質問紙は無記名で行い、その場で配布・回収した。質問紙は、フェイスシート、TEG II (東大式エゴグラム)、母性意識尺度⁷⁾、吉永ら⁸⁾の育児ストレス尺度(経験の程度のみ使用)を用いた。

TEG IIは、自我状態について得点化したものであり53項目からなっている。作成時の信頼性については、Cronbachの α 係数を求め内的整合性が確認されている。先行研究において、母親のパーソナリティの中でも、特に自我状態が育児中の不安やストレスに関連していることが明らかにされている⁶⁾。また、他のパーソナリティ検査に比べ質問項目数が少なく育児中の母親の負担軽減できることを考慮し、TEG IIを取り入れ、オリジナル質問紙を基に3件法で回答を求めた。

母性意識尺度は、母親役割の受容について、MP 6項目と、MN 6項目の全12項目からなっている。大日向⁷⁾は因子分析によって下位尺度の検討を行っている。先行研究において、興石は、「低い母性感情は育児不安の一要因となる可能性がある」⁹⁾と述べている。そこで、パーソナリティが母性意識と関連しどのような育児ストレスに影響するかについて検討することの

できる本尺度を取り上げ、オリジナルに基づき4件法にて回答を求めた。

育児ストレス尺度は、育児にまつわる刺激・事態・状況などのストレスについてどの程度経験したり感じたりしているか(頻度)、その状況に対してどの程度気になったか(程度)の回答を求めるものである。項目の内容は、「親としての効力感低下」に関するもの、「育児による拘束」、「サポート不足」、「子どもの特性」、「育児知識と技術不足」がそれぞれ5項目、全25項目からなっている。その信頼性について、吉永ら⁸⁾は、再テスト法による相関の検討とCronbachの α 係数の検討から、内的一貫性が高く信頼性が高いことを示している。本研究では、同じ質問に対して頻度と程度の2種類の回答を求めると回答の難しさと、回答する内容を少なくすることで母親への負担を減らすことを考慮し、経験の頻度のみを取り入れ、4件法で回答を求めた。

分析方法は、母性意識尺度とTEG IIの「FC」と「AC」が育児ストレスにどのように関連しているか検討するためパス解析を行った。

III. 結 果

対象者のうち有効回答は116名であった。第1子をもつ母親が75名、第2子以降をもつ母親が41名であった。母親の平均年齢は32.26(±4.78)歳であった。

信頼性分析の結果、TEG IIでは、「CP(批判的な親)」($\alpha = .74$)、「NP(養育的な親)」($\alpha = .78$)、「A(大人)」($\alpha = .83$)、「FC」($\alpha = .75$)、「AC」($\alpha = .86$)となり、母性意識尺度では、「MP」($\alpha = .86$)、「MN」($\alpha = .72$)となり、育児ストレス尺度では、「親としての効

表1 各因子における得点

		平均値 (標準偏差)	
TEG II	CP(批判的な親)	11.10	(3.91)
	NP(養育的な親)	12.90	(4.15)
	A(大人)	11.16	(4.80)
	FC(自由な子ども)	12.38	(3.94)
	AC(順応した子ども)	11.83	(4.92)
母性意識尺度	MP(積極的・肯定的)	18.76	(3.15)
	MN(消極的・否定的)	18.38	(3.03)
育児ストレス尺度	親としての効力感低下	11.12	(3.15)
	育児による拘束	13.29	(3.32)
	サポート不足	8.28	(3.24)
	子どもの特性	11.41	(3.53)
	育児知識と技術不足	10.19	(3.07)

表 2 各因子間の相関

		自我状態 TEG II		母性意識		育児ストレス				
		FC	AC	MP	MN	親としての 効力感低下	育児による 拘束	サポート 不足	子どもの 特性	育児知識と 技術不足
T E G	FC		-.235*	.336**	-.176	-.213*	-.199*	-.186*	-.157	-.186*
	AC			-.037	.248**	.225*	.043	.178	.187*	.355**
意母 識性	MP				-.449**	-.480**	-.286**	-.283**	-.209*	-.090
	MN					.508**	.593**	.516**	.296**	.349**
育 児 ス ト レ ッ サ ー	親としての効力感低下						.356**	.374**	.325**	.209*
	育児による拘束							.361**	.334**	.214*
	サポート不足								.222*	.202*
	子どもの特性									.169
	育児知識と技術不足									

*p<.05, **p<.01

力感低下」($\alpha = .85$),「育児による拘束」($\alpha = .79$),「サポート不足」($\alpha = .87$),「子どもの特性」($\alpha = .82$),「育児知識と技術不足」($\alpha = .83$)となり,ある一定の信頼性が確認された。これらより,一定の信頼性を確認し,質問紙オリジナルの因子で分析を行った。各因子の平均得点と標準偏差を表1に示した。

本研究では母親のパーソナリティの中でも,特にTEG IIの「FC」と「AC」に着目し,TEG IIの「FC」と「AC」,母性意識尺度の「MP」と「MN」,育児ストレス尺度の「親としての効力感低下」,「育児による拘束」,「サポート不足」,「子どもの特性」,「育児知識と技術不足」について相関分析を行った。

SPSS による相関分析の結果(表2),「FC」と「MP」に正の有意な相関が認められた。育児ストレス尺度は,「FC」と,「親としての効力感低下」,「育児による拘束」,「サポート不足」,「育児知識と技術不足」の4因子間で負の有意な相関が認められた。また,「AC」と「MN」に正の有意な相関が認められ,「AC」と「親としての効力感低下」,「子どもの特性」,「育児知識と技術不足」の3因子間で正の有意な相関が認められた。さらに,「MP」と「親としての効力感低下」,「育児による拘束」,「サポート不足」,「子どもの特性」の4因子間で負の相関が認められ,「MN」と育児ストレスの先の4因子と「育児知識と技術不足」の5因子すべての間に正の相関が認められた。

パス解析の結果(図),「FC」では,「MP」を介して「親としての効力感低下」へ有意なパスが認められた。「AC」では,「MN」を介してストレス尺度のそれぞれに有意なパスが認められた。さらに,「AC」では「育児知識と技術不足」へ直接有意なパスが認め

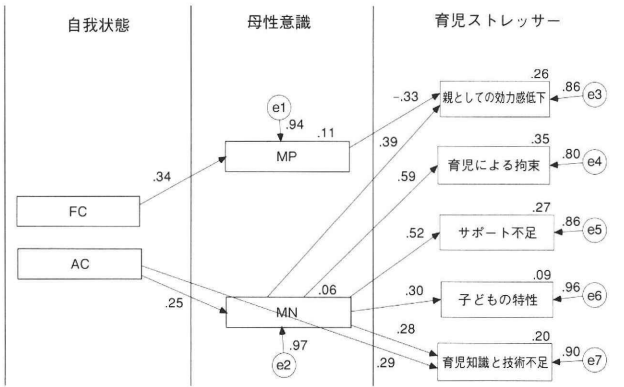


図 母性意識・パーソナリティの育児ストレスへの影響

られた。パス図のモデル適合度指標はGFI値が.899, AGFI値が.832であり,これらの結果は妥当なものであると考えられる。なお,母親の自我状態の中でも,特に子どもの自我状態を示すパーソナリティに着目するため,「FC」と「AC」のみ記載することとする。

IV. 考 察

「FC」と「MP」の間に正の有意な相関が認められたことと,「FC」と「子どもの特性」を除く育児ストレス因子の間に負の有意な相関が認められたことから,「FC」が高い母親は母性や育児を積極的・肯定的に捉えていることが示された。また,高い「FC」は育児ストレスを軽減する傾向があると考えられる。これは,「FC」には自由奔放で感情をストレートに表現するという特徴があり,ものごとに左右されにくいためであると考察した。

また,パス解析の結果から,「FC」は積極的・肯定的な母性意識に影響を与え,「親としての効力感低下」によるストレスの軽減に影響することが示された。こ

れは、「FC」の直感的な感覚や自由さが育児や母性を肯定的に捉える傾向にあり、親としての効力感を低下させにくくする、あるいは効力感が高められるためにストレスを感じにくくなると考察される。さらに、「FC」が高い母親は「自由奔放で、好奇心・積極性・創造性に富む」という傾向がある。そのため、子どもの奔放性に対する親和性が高く、子どもを受容しやすいと考えられる。これが、ストレスの感じにくさにつながると推察される。なお、「FC」と「子どもの特性」の間に有意な相関が認められなかったのは、「子どもの特性」は母親自身の問題から派生するストレスではなく、母親のパーソナリティ特徴では解決されない問題を多く含むためであると思われる。

次に、「AC」と「MN」に正の有意な相関が認められ、「AC」と「親としての効力感低下」、「子どもの特性」、「育児知識と技術不足」の3因子間で正の有意な相関が認められたことから、高い「AC」は消極的・否定的な母性意識をもたらし、育児ストレスを強める傾向があると考えられる。

また、パス解析の結果について、「AC」と「MN」の間に有意なパスが認められたことから、「AC」が高い母親は母性や育児を消極的・否定的に捉えていると考えられる。これは、「AC」には「他人の評価を気にし、ものごとに左右されやすい」傾向があるためと思われる。加えて、「AC」は否定的な母性意識に影響を与えており、さまざまなストレスの加重に関連していることが示唆された。これは、「AC」には「自分の価値は低いと思い劣等感を持ちやすい」という特徴があるため、母性意識を高められず否定的に捉える傾向にあることから、さまざまなストレスに影響を与える結果となったと考えられる。さらに、「AC」が高い母親は「自己主張が少なく良い子としてふるまう」という従順さを持つ傾向がある。そのため、子どもの自由さや奔放性に対して共感できない部分が多く、ストレスを感じやすいと推察される。また、「AC」が特に「育児による拘束」と「サポート不足」の2因子に大きく影響している点について、「AC」は「他者を優先し他人に依存し感化されやすく主体性に欠ける」という特徴を持つため、子ども主体にものごとを考え、行動し、育児により拘束されていると感じる状況を作りやすいためと推察される。「サポート不足」については、夫や家族の対応やサポートに不満があるというストレスの他に、夫や家族の言動に過敏に反応するためストレ

スに感じやすい傾向があり、このような結果になったと思われる。

さらに、「育児知識と技術不足」によるストレスは「AC」から直接影響を受けている。これは、「AC」のような順応した論理的な思考を持つ母親は、「他者を優先し、慎重で忍耐強い」という特徴があり、育児に対して「～しなければならない」という観念を強く持っているためであると推察される。そして、自身の理想とする育児ができなかった時に特にストレスを感じる傾向にあると考察された。

また、「MP」と育児ストレスに関する因子の間に有意な相関が認められたことは、肯定的な母性意識が育児ストレスを軽減する傾向にあることを示唆している。これは、育児や母性意識に対して肯定的な感情を持つことで育児ストレスを感じにくくし、ストレスを感じても肯定的な感情からストレスを自然に回避・解消することができるためではないかと考察される。

これらより、直感的な感覚や自由さは、肯定的な母性意識に影響を与えており、「親としての効力感低下」によるストレスを軽減していると考察される。反対に、順応した、論理的な思考は、否定的な母性意識に影響を与えており、さまざまなストレスに関連していることが示唆された。よって、母親の自我状態の「FC」を高めることで、育児に対して肯定的な感情を持ち、ストレスを感じにくくするためのサポートが必要であると考えられる。

今後の課題として、母親の年齢、母親の職業などによりエゴグラムの結果が左右される可能性があるため、今後はそれらの影響についても検討する必要があると思われる。また、子どもの月齢により育児ストレスの内容が異なる可能性があるため、子どもの月齢別に関連性を検討する必要もある。さらに、子どもが第1子であるか、第2子以降であるかによっても結果が左右される可能性がある。また、TEG IIについて、「CP」、「NP」、「A」の3要因を含めた育児ストレスとの関係を検討することで、新たな知見を得たい。さらに、育児の質の向上についても支援できるよう、研究を深めていきたい。加えて、母親への支援に有効的なものにするため、具体的な支援方法も合わせて検討する必要があると思われる。

V. 結 語

これまでの研究を通し、母親の自我状態に着目し、特に、「FC」と「AC」という子どもの自我状態が、母性意識と関係し、育児ストレスに影響を与えているという結果が得られた。「FC」の直感的な感覚や自由さは、肯定的な母性意識に影響を与え、反対に、「AC」の順応した、論理的な思考は、否定的な母性意識に影響を与えることでさまざまなストレスに関連していることが示唆された。この結果から、「FC」を高めることで、育児に対して肯定的な感情を持ち、ストレスを感じにくくするためのサポートが必要であると考えられた。

今後の展望として、育児に困難感のある母親やサポート不足の母親への早期介入、細部に至るケアを実現するため、どのようなサポートが育児ストレスを問題とする母親への支援に有効的に活用できるか模索し、さらに研究を深めたい。

本研究は日本心理臨床学会第31回秋季大会で発表したものを加筆訂正したものです。さまざまな示唆をいただいたことに感謝いたします。

本論文の作成にあたり、ご指導を賜りました金城学院大学人間科学部の北折充隆准教授に感謝いたします。

利益相反に関する開示事項はありません。

文 献

- 1) 倉橋しのぶ, 大田晶子, 松岡治子, 他. 乳幼児健診に来所した母親のメンタルヘルスに及ぼす因子の検討—対象児の年齢との関連. 女性心身医学 2005; 10 (3): 181-186.
- 2) 山口咲奈枝, 遠藤由美子. 低体重児をもつ母親と成熟児をもつ母親の育児不安の比較. 母性衛生 2009; 50 (2): 318-324.
- 3) 繁多 進, 大日向雅美. 母性. 初版. 東京: 新曜社, 1988.

- 4) 光盛友美, 山口 求. 養育期における母親の子ども虐待の予防に関する研究—ベビーマッサージを体験した母親と体験していない母親との比較検討. 日本小児看護学会誌 2009; 18 (2): 22-28.
- 5) 喜多淳子, 田中恵子, 坂間伊津美. 育児期の母親の自我状態, 育児不安, 及び自己評価 (第1報)—エゴグラム・プロフィール・パターンと育児不安, 及び自己評価との関連. 母性衛生 2001; 42 (4): 806-813.
- 6) 木内千暁. エゴグラムで深いU型を示し産後育児障害をきたした2例. 女性心身医学 2001; 6 (1): 124-133.
- 7) 大日向雅美. 母性の研究. 3版. 東京: 川島書店, 1990.
- 8) 吉永茂美, 眞鍋えみ子, 瀬戸正弘, 他. 育児ストレス—尺度作成の試み. 母性衛生 2006; 47 (2): 386-396.
- 9) 興石 薫. 育児不安に影響を与える要因についての縦断的研究—予期不安尺度と期待感尺度の作成—. 小児保健研究 2002; 61 (5): 686-691.

〔Summary〕

Using an 'egogram' and enforcement of applying Path Analysis for mothers (N = 143) performing child-care, this study examined mothers' personality in relation to parenting stress. The results showed that a high score of 'FC' reduces stress, intuitive feelings and freedom positively affects the participants' consciousness of motherhood. However, the mothers with high scores of 'AC' experience more severe stress when they do not achieve highly influential, high-pressure ideals in child-rearing.

〔Key words〕

egogram, parenting stress, personality